明治大正昭和初期、西本願寺関連施設研究序説 ーニ楽荘に於ける鵜飼長三郎の役割ー

椿 和

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

我国に於ける印度的建築の発端は、伊東忠太設計の築地別院(1934)とされるが、明治大正昭和初期に建立された西本願寺関連施設には、ハワイ別院(1918)・神戸別院(1930)・上海別院(1931)など、印度的建築はその他にも散見され、伊東が設計したのは築地別院のみである。従って印度的建築の背景には伊東の設計思想のみならず、日清・日露戦争に於ける我国の大陸進出に伴う従軍布教(アジア開教)や①、西本願寺法主大谷光瑞の企図した仏教文化の原点探索(大谷探検隊)など②、近代化する社会に於ける教団の存続のため世界進出をも模索した③、我国最大の教団西本願寺の活動と、それを植民地に於ける思想統制に転用しようとした国家の戦略とを考慮する必要がある。以上のような状況から、西本願寺は近代宗教としての広告塔に、仏教の原点である印度の建築意匠を利用したと予見される。



図 1 築地別院 正面圖④

これを証明する前段階として、本稿では我国に於ける印度的建築の端緒であり、従来伊東の印度的建築として理解されてきた光瑞の別邸二楽荘(1909)が、西本願寺技師鵜飼長三郎、即ち西本願寺を主体として設計された建築である事を検証する。

1-2 研究の方法と手順

二楽荘が伊東の作品とされる根拠は「伊東忠太建築作品」(1941)の「伊東博士主要作品年表」である事を確認した^⑤。これに対し本稿では、鵜飼の著作や「建築工藝叢誌」第二〇冊(1913)に掲載された鵜飼の解説

並びに伊東の評論を、以下のように精読する。

第2章では鵜飼の著作「各種商店建築圖案集」「和洋住宅間取實例圖集」「實費建築中流住宅五十種 及 材料の計算」(以後は「商店」「住宅」「實費」と略記)から、鵜飼の実務的且つ多様な建築様式を把握した雛形建築家としての実像を考察する。

「商店」は1907年9月に印刷された、60の図案(銅板彫刻)とその解説から成る図集である。「商店」では鵜飼が一貫して建築の用途に様式を当て嵌めている事から、建築に対する鵜飼の表層的な理解を示す。

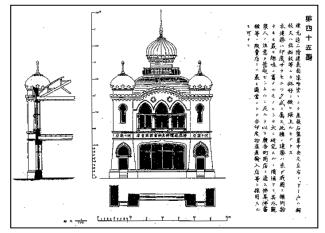


図 2 第四十五圖 (印度サラセン様式) ®

「住宅」は1907年1月に印刷された、50の実例(銅板彫刻)とその解説から成る図集であり、「實費」は1931年9月に印刷された、仕様書を伴う50の図案から成る図集である。鵜飼の凡例と伊東の序文から、見積や仕様書を掲載するなど、鵜飼の実務的側面を確認する。

第3章では「建築工藝叢誌」第二〇冊に寄稿された 鵜飼の解説「二樂莊建築工事概要」から、二楽荘がそ の各室に各種様式を適用された雛形建築であり、それ は先述した鵜飼の思考と全く矛盾せず、整合的に理解 される事を明らかにする。

又、同時に掲載された伊東の評論「二樂莊の建築」 から、伊東の関与の実際を明らかにすると共に、細部 意匠に対する伊東の批判的な態度を指摘する。 以上より、第 4 章では二楽荘が実質的に鵜飼によって設計された、西本願寺の強い主体性の下に実現した 建築であると結論する。

2 雛形建築家としての鵜飼長三郎

鵜飼は明治末期には西本願寺技師、大正昭和期には 東京府内務部営繕課長であり[©]、二楽荘のみならず真宗 信徒生命保険会社や西本願寺香港布教所といった伊東 の西本願寺関連計画に於ける関与も指摘されている[®]。 本章では蒐集した著作から、その建築家像を考察する。

2-1 各種商店建築圖案集

「商店」は伊東が校閲を行っている[®]。前頁の図 2 は その一例だが、他の 59 図も同様の構成である。以下は その解説の一部である。

本建築は印度「サラセニック」式ニ属ス。此種ノ建築ハ未ダ我國ニ類例抄ナキモ最モ趣味ニ富メルモノニシテ大ニ研究スルノ價値アリ. 其外観参人ノ注意ヲ 惹起セシムルニ足ルヲ以テ廣告的商店ニ適ス佛具佛書類等ノ販賣店ニハ最モ適當ニシテ亦印度物産直輸入店等ニ採用スルモ可ナリ.

鵜飼は印度サラセン様式を、衆目を集める様式として広告的商店に推奨している他、佛具などの販売店やインド物産直輸入店などにも推奨している。僅か数行ではあるが、様式に用途を対応させた、建築に対する鵜飼の表層的な理解を端的に物語っている。

印度サラセン様式は第四十五圖のみであるが、「商店」を通してその思考は一貫しており、第一圖ではアール・ヌーヴォーを奇抜な様式として推奨している他、洒脱なる様式であるが故に、生花・造花・絵葉書・帽子・洋傘・貴金属などの販売店に最適であると述べている。以下は第一圖とその解説の一部である。

通行人ヲシテー見奇異ノ感想ヲ黎起セシメ窓内部 ニハ商品ヲ美術的ニ陳列シ夜間ハ建物輪廊ニ多クノ 電燈ヲ輝カシ以テー層美観ヲ加へ顧客ヲ迎フルヲ可 トス. 本建築ハ洒脱ナル様式ナルガ故ニ生花・造花・ 絵葉書・帽子・洋傘・貴金属等ノ販売店ニ最モ適當ニ シテ「ビーヤホール」等ニモ亦妙ナラン.

但し、鵜飼は印度サラセン様式について、我国には 稀少だが最も魅力に富む様式として、大いに研究する 価値があると述べているが、そのような評価は他の 59 図には視られない。鵜飼の注目の程度が窺える。

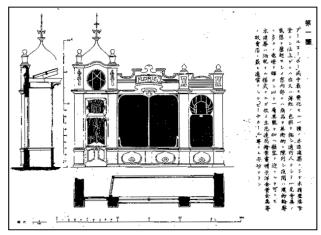


図 3 第一圖 (アール・ヌーヴォー) ⑩

以上より、「商店」からは鵜飼が多様な建築様式を把握した雛形建築家である事が明らかとなった。

2-2 和洋住宅間取實例圖集

「住宅」も伊東が校閲を行っている。鵜飼は各図に 総工費と坪単価を記載している事から、実務的性格を 十分に推察する事が出来る。これについては伊東も序 文で以下のように賞賛している。

総工費及一坪当りの工費の見積を示されたるは大 に善し。用意頗る深切と云ふの外はない。この書に依 て世人の享ける利益は実に膨大でなければならない。 我輩は著者の勞を謝すると同時に世人がかゝる便利 なる參考書を得られたることを悦するのである。

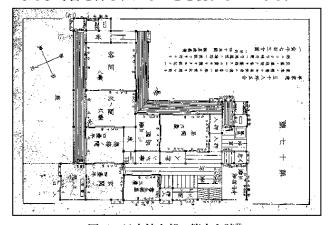


図 4 日本館之部 第十七號^⑪

2-3 實費建築中流住宅五十種 及 材料の計算

鵜飼は各図に仕様書を添付している他、自序では以下のように述べており、現実に即した思考の持主である事や、理論家を遠慮する意思が読み取れる。

造るに當つては、最小限度の費用を以て最大限度の 效果を擧げなければならぬのであります。(中略) 特 に住宅學などと稱するものでもなければ、又將來の理 想を説けるものでもありません。現在行はれつゝある 建築に對し、建築主が一般的に注意し心得置くを要すと思はれる事の種々を列擧したに止ります。

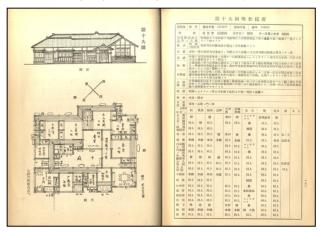


図 5 第十九圖とその略仕樣書®

本章では鵜飼の著作「商店」「住宅」「實費」から、 その実務的且つ多様な建築様式を把握した雛形建築家 としての実像を明らかにした。

3 雛形建築としての二楽荘

1907年3月、宮内省によって須磨月見山別邸を買い上げられた光瑞は、新たな別邸の建設に兵庫県武庫郡本山村岡本(現在の神戸市東灘区岡本)の山麓を選定し、以降数年に渡って本館を中心とする様々な施設の設営を行ったが[®]、その本館が二楽荘である。二楽荘は1908年3月に起工し、1909年9月に竣工した木造二階建の建築である[®]。南に聳える塔や西のドーム、北の玄関屋根など、外観は印度のアーグラ城塞やタージ・マハルを模したとされ、内部には支那室・アラビヤ室・英國室・印度室などが存在する[®]。



図 6 二楽荘®

3-1 鵜飼の語る二楽荘

本節では、二楽荘の建築様式・構造・間取配置・防

火設備・暖房装置・室内装飾などに関する鵜飼の解説 「二樂莊建築工事概要」を扱う。鵜飼は建築様式につ いて以下のように述べている。

建築外觀の樣式は、印度サラセン式にして、内部は 室毎に樣式を異にし、印度、支那、英國、アラビヤ、 エヂプト等に分類せり。

それらの様式は具体的にどう適用されたのか。 鵜飼は室内装飾について以下のように述べている。

支那式: 天井格縁内張付は雲龍の彩色畫にして、中央折上げ天井は、四方天人遊飛の圖にして、中央に圓形雲龍圖を嵌込、周圍側壁は總で張付枠として、唐詩集石摺を紅唐紙表裝にて貼付け、時々石摺を取替へ得るに便にし、側壁上部は裂地に唐模樣鳳凰圖を貼付し、椅子、卓子等の器具は、全部支那製にして紫檀造なり。

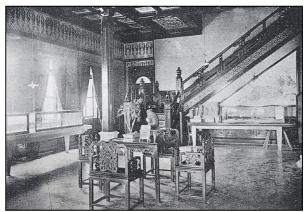


図 7 支那室®

印度式:床周圍は寄木張の輪廓を作り、中央模様絨毯を敷込み、四方壁は張付枠とし、窓間毎に印度古代壁畫を摸寫し、天井は「チーク」材折上げ格天井にして、蓮華模様の彫刻を取付、中央には特製の「シーリング ライト」を嵌込めり。



図 8 印度室®

鵜飼は「アラビヤ式、アールヌーボー式、古代英國 式、英國レネーサンス式、エヂプト式」も同様に解説

しており、各室の意匠が各種の様式を直接的に当て嵌 められたものである事が判る。二楽荘こそは様式の適 用から成る雛形建築であり、それは第2章で述べた鵜 飼像と全く矛盾せず、寧ろ整合的に理解される。

3-2 伊東の語る二楽荘

本節では、二楽荘の概要・設計・助言・批評などに 関する伊東の評論「二樂莊の建築」を扱う。

建築のプラン及その各室の様式の變化は、伯が特殊 の要求に出たるものなり。外形を印度サラセン様とせ るも、伯の註文に出たるものなり。但細部の手法、材 料構造は主として鵜飼氏の意匠に成り、施工の全責任 は鵜飼氏に歸せり。

本館の平面、各室の様式、及び外観の印度様式は光 瑞によって要望されたものであり、細部意匠、材料構 造、及び施工の全責任は鵜飼が担当したと述べている。 従って二楽荘の実質的な設計は光瑞の意を受けた鵜飼 によって行われたと言える。

余は此設計の當時、鵜飼氏の希望に應じ、多少の助 言を試みたることあり。参考の圖書を示したることあ り。落成の後行て觀覽し、伯の説明を聞きて之に批評 を加へたることあり。(中略) 只其ドームの形、玄關、 窓等の局部を檢すれば、やゝ物足らず思はるゝ節もあ り。但し比較的低廉なる工費と、僅少なる日子とに對 しては、頗る良好の成績を擧げたりと云ふを得可し。 (中略) 但内部各様式の装飾には物足らず思はるゝ節 少なからず、例之ば、印度室の裝飾は、悉く印度式手 法、印度文様等を以て經營されたるに係らず、何とな く未だ充分に印度の空氣に接するの感想を生ぜしめ ざるは如何。埃及室に至りてはこの感殊に深し―

伊東によれば、設計に対する関与は「*多少の助言*」 と「*参考の圖書*」のみである。又設計の批評としては 工期と工費の制約の中での成果を讃えている反面、細 部意匠には不満を述べている。特に印度室については 雛形建築家である鵜飼に対する辛辣な批判と言えよう。 伊東は結論として以下のように述べている。

要するに本建築は、大谷伯の創意と鵜飼氏の設計監 督とに由て完成せる、本邦無二の珍建築として特に之 を江湖に紹介するの價値ありと思惟す。余が幾分この 建築に關與せるは一

伊東は二楽荘を「*本邦無二の珍建築*」と評している

一方で、それは光瑞と鵜飼によって実現した建築であ る事を明言している。先に「*多少の助言*」という言葉 が見られたが、念を押すように「*幾分*」の「*關與*」と 述べている事からも、伊東は自らの関与を否定してい ると解釈される。

本章では「二樂莊建築工事概要」から、二楽荘が雛 形建築である事を明らかにし、「二樂莊の建築」からは 鵜飼と伊東の関与の実際と、二楽荘の意匠に対する伊 東の批判的な態度を看取した。

4 おわりに

4-1 二楽荘に於ける西本願寺の主体性

第2章、第3章で得た章結を勘案し、鵜飼が二楽荘 の実質的な設計者であり、二楽荘は西本願寺の強い主 体性の下に実現した建築であると結論する。

4-2 明治大正昭和初期、西本願寺関連施設研究

本稿では従来明らかでなかった鵜飼像と、二楽荘の 実質的な設計者が鵜飼である事を検証した。引き続き 印度的意匠を有する別院について史料を蒐集し、二楽 荘に始まる印度的建築が、明治大正昭和初期の西本願 寺関連施設に於いて成立した背景を検証したい。

参考文献と図版出典

[◎] 嵩満也(龍谷大学国際文化学部)「戦前の東・西本願寺のアジア開教」(「国際社会文 化研究所紀要」第8号、295-300頁、2006年)。

② 入澤崇(龍谷大学経営学部)「スリランカの大谷探検隊」(「パーリ学仏教文化学」第 17号、11-20百、2003年12月)。

③ 嵩満也(龍谷大学国際文化学部)「戦前の東・西本願寺のアジア開教」(「国際社会文 化研究所紀要」第8号、295-300頁、2006年)。

[「]伊東忠太建築作品」(伊東博士作品集刊行會、城南書院、1941 年 10 月) 48 頁。

[「]伊東忠太建築作品」(伊東博士作品集刊行會、城南書院、1941年 10 月)。 鵜飼長三郎「各種商店建築圖案集」(建築書院、1907年9月)第四十五圖。

東京都公文書館の東京府組織一覧から、鵜飼は少なくとも 1921~1934 年の間、内務 部営繕課長を務めていたと考慮されるが、それ以外の所属は明らかでない。鵜飼が 二楽荘の時点で西本願寺技師なのは「建築工藝叢誌」の記述から確認されるが、鵜 飼は「住宅」で「公務ノ餘暇」「實例ヲ蒐集シ」、「商店」で「公務ノ餘暇」「製圖ニ 着手シ」と述べており、後に東京府に所属している事からも、元々東京府職員とい う可能性がある。鵜飼は出版によって伊東と知り合い、伊東を通して西本願寺と知 り合ったのであろうか。鵜飼(1907年以前は越本)については「明治・大正・昭和 人名辞典」「明治大正昭和京都人名録」「同東京人名録」(上巻)に記載されておらず、 同(中巻)(下巻)に氏名・所属・住所・所得税・電話番号が記載されるのみである。

[®] 倉方俊輔「伊東忠太の西本願寺関連の計画について」(「日本建築学会 計画系論文集」 第 566 号、169-176 頁、2003 年 4 月)

[®] 鵜飼が元々西本願寺技師であるならば、鵜飼が伊東と出会った時期は推定される。 前掲註®によると、伊東は1906年7月に西本願寺へ来訪しているが、伊東はその際 関東別院の設計を依頼された可能性が高く、鵜飼とは同日対面した可能性がある。 「住宅」が印刷されたのは 1907 年 1 月であるが、50 の図面は銅板彫刻され、凡そ 100 年前の印刷技術である、入稿はそれに相応の日子先立つとして、それまでに鵜飼は 伊東に校閲を依頼した事になる。従って鵜飼は伊東と1906 年 7 月~1906 年 12 月の 間に出会った事になる。

鵜飼長三郎「各種商店建築圖案集」(建築書院、1907年9月)第一圖。

⑩ 鵜飼長三郎「和洋住宅間取實例圖集」(建築書院、1907年1月)日本館之部 第十七

[®] 鵜飼長三郎「實費建築中流住宅五十種 及 材料の計算」(建築書院、1931年9月)第 十九圖。

[「]二楽荘と大谷探検隊」(芦屋市立美術博物館、1999年10月)3頁。

[®] 鵜飼長三郎「二樂莊建築工事概要」(「建築工藝叢誌」第 20 冊、138-142 頁、1913 年) 138、140 頁。

二楽荘と大谷探検隊」(芦屋市立美術博物館、1999年10月)61頁。

[「]二楽荘と大谷探検隊」(芦屋市立美術博物館、1999年10月)表紙。

[「]二楽荘と大谷探検隊」(芦屋市立美術博物館、1999年10月)63頁。

[「]二楽荘と大谷探検隊」(芦屋市立美術博物館、1999年10月)63頁。